大黒俊二・林佳世子・南川高志編『岩波講座　世界歴史３：ローマ帝国と西アジア　前３～７世紀』

粟辻　悠

（１）はじめに：『岩波講座　世界歴史』今期の位置づけ

本書は、２０２１年１０月より刊行が開始されている『岩波講座世界歴史』全２４巻の第３巻と位置づけられており、第１巻（同年同月発売）及び第５巻（同年１１月発売）に引き続き、同年１２月に発売された。その刊行時期から、本評は（主として、評者の専門とするローマ法の観点からの）あくまで速報的なものとなることを予めお断りしておく。

『岩波講座　世界歴史』シリーズ（以下、「本シリーズ」と称する）は、１９６９年から１９７１年にかけて刊行された第１期（全３１巻)、１９９７年から２０００年にかけて刊行された第２期(全２９巻)、そして２０２１年から刊行が開始された今期（全２４巻予定）と、およそ四半世紀に一度のペースで編まれてきている。そのコンセプトは、今期「編集にあたって」においても明記されている通り、「すべての人に大学の授業のような研究の最前線を届ける」という「原点」に立脚するものであり、本シリーズではこれまでも各分野の専門家が最新の研究成果に基づいて、その時々の世界における最先端の知見を多くの読者に提供してきた。

そして各期を隔てるおよそ四半世紀という時間は、個別的な実証レベルの発展にのみ反映されてきたわけではない。各期の全巻を貫かんとする編集の方針、「世界歴史」という対象への視座の据え方それ自体についても、大きな変化をもたらしてきた。例えば第１期においては、古代・中世・近世・近代という時代区分が（その具体

的な意義については留保が付されつつ）各巻の区分としても堅持されていたのに対して、第２期以降はそれらが区分として明示されることはなくなり、今期には各地域の実態に応じた一層自由な編別が採用されるに至っている（本書の巻末にも付されているマトリクスを参照）。あるいは第１期においては各地域世界の並立を前提としつつも「世界史を貫く共通の法則」への意識が全体として強かったのに対して、第２期においては個別的な地域の通時的な展開を主として扱うＡ系列と、時代の特色を共時的・地域横断的にとらえるＢ系列を設けるという工夫がなされていたという点に一層注目する向きもあろう。今期の特徴としては、アフリカやオセアニアといった従前の注目度が低かった地域への目配りが強調されているところであるが（今期「編集にあたって」）、特にヨーロッパに関連しては、１５世紀頃までの時期を扱う諸巻において常に西アジアとセットでの構成がなされているという新規性が目を引く（第２巻「古代西アジアとギリシア」、本書（第３巻）、第８巻「西アジアとヨーロッパの形成」、第９巻「ヨーロッパと西アジアの変容」）。

（２）『岩波講座　世界歴史』今期の枠組み

今期各巻の記述は、対象地域・時代の通史を描く「展望」、通史の中で特に問題となるテーマを掘り下げる「問題群」、個別的なテーマで時代像を補完する「焦点」という３つの部分から構成されている（今期「編集にあたって」）。これは第２期における「構造と展開」「境域と局所」「論点と焦点」を３つの柱とする構成と形式的には似通っているが、最後の１つである「焦点」と「論点と焦点」との類似性を除けば、実質的にかなり異なるコンセプトである。各期の編集方針の記述において既にその相違は見て取れるが、具体的な例

として本評の対象とする今期第３巻と、それとの連続性が比較的強い第２期第４巻（「地中海世界と古典文明」）とを比べて見る限り、この構成の違いは著述の内容にも実際に大きな差を及ぼしているように思われ、両期にそれぞれ独自の意義を持たせる主要因の１つとなっている。例えば第２期第４巻の「構造と展開」は、今期の通史的な「展望」と比べて個別的なテーマへの掘り下げに重心があると言えようし、またとりわけ「境域と局所」の各章の対応物は今期には存在しないため、その意義は依然として顕著である。

本シリーズが一般的な教科書ではなく、論集としての性質を強く持つものであることからして、以上のような結果となるのも当然ではある。今期の刊行を得たこの機会に、読者それぞれの視点から各期の内容を見比べつつ改めて精読するのも、極めて有意義であろうと思われる。

（３）本書（第３巻「ローマ帝国と西アジア」）のテーマ設定

では、本評の対象とする第３巻は具体的にどのようなテーマをもって編まれているのであろうか。まずタイトルの段階で注意を惹かれるのが、「ローマ帝国」と「西アジア」とを対置する空間設定と、前３世紀から（後）７世紀という時間設定であろう。

まず空間については、もちろん「西アジア」とセットでの構成という点と、さらに「ローマ帝国」という設定自体が大きなインパクトである。前者の点については、「展望」（南川高志）において、両側の「大国家の歴史や両者の関係」が、「古代世界の歴史的意義を考える上で基軸となる」との評価がなされており（３頁）、記述分量としてはローマ側に偏りながらも、「問題群」「焦点」に一つずつ西アジアに関する章が置かれている。この構成が本書において具体

的にどのような形で生きているのかについては、個別的な検討を踏まえたうえで最後に改めて振り返ってみたい。

後者の「ローマ帝国」という設定のインパクトも、見ようによっては前者に劣らず大きい。というのも第１期も第２期も、「ローマ」世界に関する叙述に多くの紙幅を割いてきたことは変わらないにしても、それは（ギリシア・ローマ世界を中心に据えた）「地中海世界」という大枠のもとにおいてだったからである。特に第２期第４巻の冒頭においては、「西洋古代史をギリシアとローマ、あるいは古典古代を中心に見ること」は「やむをえないにしても、それらの周辺にある諸民族の歴史や文化にも十分に配慮しなければならない」という観点から、「地中海世界」という概念が用いられるようになった、という認識が示されている。そしてまさしくその配慮に基づいて、前述の「境域と局所」の各章（対象はシチリア、エトルリア、カルタゴ）が編まれてもいたのである。

そうしてみると、本書の内容は西アジアとの対置という文脈では大きな空間的広がりを見せつつも、こと「地中海世界」に限ってみれば「ローマ」中心主義的になったという予断を持つ人もいるかもしれない。しかも「帝国」という概念に結び付けられがちであった「支配と従属」という図式がそこに合成されれば、西側空前の大帝国を築き上げて諸民族を支配し服従させたローマ帝国が、東側の専制的大帝国たる西アジアの諸帝国と、互いにその領域における唯一の代表主体として対峙する、という世界観さえも立ち上がってきそうである。

しかし本書の編集方針は全くそのような趣旨ではない。そこにまさしく、歴史観をめぐる現代の議論状況の複雑さがある。本書「展

望」の冒頭において南川は、ギリシア・ローマ世界を「古典古代」「古典文明」と位置づけることに対する近年における批判（「ルネサンス以来の伝統的なヨーロッパ人の価値観に偏っている」）を挙げ、また「地中海世界」という把握に対しても、その学問的領域概念の中に入ってこない要素（ケルト人、ゲルマン人が例に挙げられる）の等閑視や、地中海という要素の歴史的影響力への過大評価につながるとの批判が端的に述べられる。古典古代という枠組みのみならず地中海世界という空間設定さえも、「ローマ帝国」からすればある意味で限定的に過ぎる、とでも言い換えられようか。そしてまたこの「帝国」という概念も、伝統的にしばしば前提とされてきたような「支配と従属」の構造を指すだけのものとは捉えられていない。「地中海世界」よりもさらに広く、多様な気候風土（７－８頁)、マイノリティも含む多様な人々とその活発な活動をも含み込んだダイナミックな空間として捉えられているのである。

ただ、仮に例えば同時代的な世界の把握として「古典古代」や「地中海世界」よりも「ローマ帝国」という括りが正当である（あるいは実りが多い）としても、その「世界史的な意義」が具体的に何であるのかという問いに対する答えは、実はそれほど自明なものではない（特に本書のように、その世界に生きた人々の目線から実証的に記述しようとすればするほど、大きな視点との接続は難しくなりがちでもある)。というのもその答えはこれまでしばしば、本書が「拘泥しない」とする「地中海国家」性、あるいはそれにもまして「古典古代」性に求められてきたように思われるからである。この点に対する本書からの具体的な解答がいかなるものであるかもまた、各章の記述内容の検討後に改めて考えてみたい。

次に、前３世紀から後７世紀という時間の設定についてはどうであろうか。最初に注目されるのはその始期であろう。というのも本シリーズにおけるローマ世界に関する記述は、やはり「古典古代」「地中海世界」としての「ギリシア・ローマ世界」という枠組みの中でなされてきており、ギリシア世界から（とりわけ共和政期の）ローマ世界への接続が、該当する各巻の内部において図られてきたからである（第１期第２巻、第２期第４巻）。もちろん今期においても、個別的な記述のレベルでは両世界のつながりが随所に指摘されてはいるが、両世界に関する記述が第２巻と第３巻とに明示的に分割されたことはやはり大きな変化である。またおそらくはそれに伴って、ローマ共和政期に関する記述が本書では相当に減少したことも目につく（今期全体のコンパクト化の影響や、執筆者の専門領域の事情もあると考えられるが）。その結果として帝政期に関する記述の割合が圧倒的になっており、この点だけでも、例えば同時期に刊行された『世界歴史大系　イタリア史１－古代・初期中世』と比較して、ローマ史の範囲における本書の独特のカラーが見て取れよう（なお同書については、本誌本号掲載の塚原義央氏による書評をも参照）。

他方で終期については、２０世紀以降の（特に英語圏の）学界を席巻した古代末期論の影響、また近年の東ローマ（あるいはビザンツ）史研究の活発化を如実に反映したものとなっている。ただ、「展望」における記述の割合からも読み取れる通り、とりわけ初期中世のヨーロッパと区分されうる時空間については、第８巻「西アジアとヨーロッパの形成」（未刊）との兼ね合いもあってか、記述量が控えめである点には注意が必要である。

このように帝政期のローマを中心とする時代設定と、帝国内の多様な人々とその活動を描写するという上述の大方針とが相まって、とりわけローマ帝国下におけるギリシア世界に関する記述が非常に充実しているのも本巻の大きな特徴となっている。古典的なギリシア・ローマ世界の接続が巻構成において切断された一方で、本書はいわば帝国的なローマ・ギリシア世界についての最新の知見を獲得できる内容になっているとも言えようか。

（４）本書各章の内容

本書は時系列に沿って章を編成しているわけでもなく、各章のナンバリングもされていないため、本評では各章の内容に即して、特に関連する章同士を接続させる形で紹介していきたい。

まず、本書の骨組みを担う「展望」（南川高志）が通史的にローマ史を論じるが、これは時系列に沿った単なる平板な叙述ではなく、最新の研究動向から提起されている諸課題にも目配りして、後続の「問題群」「焦点」に属する各章との接続を随所で意識する造りとなっている。また、概してローマ側の視点からであるとはいえ、上述のテーマ設定に従って西アジアにおける同時代的な展開にも要所で触れつつ論じていることが特徴として挙げられよう（１２－１３、２３、２５－２６、５１、５５－５６、６５－６６頁）。

本格的な歴史の叙述は第２節から始まるが、全体としては政治史を中心としたオーソドックスな内容であると思われる（経済活動に関する記述は、問題群「古代世界の経済とローマ帝国の役割」（池口）に委ねることが明示されている（４５頁））。各節の記述はおおむね、伝統的な通説の提示に始まり、それに対して問題を提起する

２０世紀末にかけての主要な学説上の展開が触れられ、今後の検討課題が提示されるという構成を基本とする。

本書の全体的な方針との関係で特色のある記述としては、例えば今後のローマ皇帝政治の研究が「共和政の制度や社会的基盤からの探求ではなく、「帝国」の観点から」なされるべきと主張される部分（２０頁）や、古代における国境をめぐる最近の研究動向（線ではなく、地帯としての国境の実態の探究）を意識した記述（２５頁）などが個別的には挙げられよう。しかし通史的な記述以外で最も大きな紙幅が割かれており、最も本書の特色を現す節は第６節「帝国最盛期のローマ社会」（３２－４５頁）であろう。第５節「皇帝政治の進展」からの連なりを一見すると、南川本人による第２期第４巻３２１頁以下「ローマ皇帝政治の進展と貴族社会」も想起されるところであるが、本書では「ローマ化」というなじみ深い概念に疑問を投げかける近時の議論状況の紹介にはじまり、属州社会に関する属州側の視点に立った記述（日常的なレベルに属するものも含む）が大いに充実している点に特徴があり、本書の「帝国」観に基づいた一貫した方針の存在を感じさせる。

また第９節「ローマ帝国の記憶と表象」は、我々の有しているローマ帝国像がいかなる前提の上に（特に近世以降）形成されてきたものであり、今なおどのように揺れ動いているのかを問い直す、近年の南川自身による業績への接続となる部分であり、本書「展望」のもう一つの特色ともなっている。

ところで、領域内の多様性を前提とした、そして属州側からの視点をも重視した広大な「帝国としてのローマ」を叙述するとなれば、そこに含み込まれている（ローマ市民には限られない）人々にとっ

て「ローマ」とはどういう存在であったのか、それほどまでに多様で自己と他者の境界認識も異なっていたであろう人々を果たして本当に「ローマ」が統合できていたのか、できていたとすればそれはいかなる意味において、そして何ゆえであったのかという問いは回避されえない。「古典古代」、「地中海世界」、あるいは「支配（と従属）」といった求心力の強い概念がある意味で覆い隠していたとも言いうる疑問に、本書は直接対峙することを余儀なくされる。問題群におけるローマ帝国に関する二つの論考と、それに連なる「焦点」の各論考は、この問いに対して様々な形で答えを出そうとしているように見える。

「問題群　ローマ帝国の支配とギリシア人の世界」（藤井崇）は、「支配」という語を表題として用いてはいるが、もちろん本書の方針から理解される通り、単純な支配・従属の構造でローマ帝国とギリシア人の関係を把握しているものではない。本章は、２０世紀後半の吉村忠典と弓削達による、ローマ人の視点から見たローマ帝国下のギリシア人像の探究をも踏まえつつ、支配される側としてのギリシア人の側から見た帝国の支配の実態と、彼らの被支配者としての意識のありようとを史料から具体的に読み取ろうとする試みなのである（著者も述べるように、このような試みが特にギリシア語圏について行われるのは、その史料の豊富さにも大きな要因がある）。

まずギリシア人の名望家層については、ある程度主体的な戦争協力をも含んだ彼らの「ローマ帝国への貢献」の実例の検討を通して、有力なギリシア人とローマ帝国との支配における部分的な「共犯」関係を一方で描くとともに、他方で特に（広義の）文化的な側面や

帰属意識においては、ローマ的なるものへの均質化の方向性に必ずしも常に同調せず、距離を保ちつつ支配の現実を消化しようとする彼らの姿勢をも指摘する。「被支配者」としてのギリシア人の複雑なありようを、ギリシア人の記述する史料に主として依拠しながら、彼ら自身の視点から提示しているのである。そして章末においては、名望家層を離れた一般民衆レベルでのギリシア人の意識をアルテミドロス『夢判断の書』から読み取ろうとする興味深い試みもなされている。

限られた紙幅の中で、最新の研究動向のみならず重要な史料をも（典拠を丁寧に指示したうえで）少なからず援用して進められる本章の記述は、バランスの取れた説得的なものに思われる。とりわけ文化的、宗教的な要素や人々の自己認識といった要素にフォーカスしている点は研究の潮流を如実に反映し、本書の全体的な方針ともマッチするものであろう。その意味で最も先端に位置するのは章末の『夢判断の書』に関する記述であろうが、ただこの部分におけるギリシアとローマの距離感に関する論証には気になる点もある。例えば皇帝の夢について述べられる部分では、「一般のギリシア人」と皇帝との距離が強調されているが、これは「ギリシア人」かどうかの問題というよりも（たとえローマ人であろうと）「一般人」かどうかの問題ではなかろうか。それに続く、夢におけるローマ人とギリシア人との区別も、両者の自己認識や文化一般の距離感を強調できるほどの内容であるか疑問なしとしない。ローマ人とギリシア人との距離という点では、むしろ両者の結婚が珍しくないものとして描かれているように見える（その法的な評価はともかくとして）ことが興味深い。

ローマとギリシアの文化的関係は、「焦点　ローマ帝国時代の文化交流」（田中創）が中心的に扱うテーマでもある。この章は、ローマ文化にギリシア文化が与えた影響（狭義の文学作品のみならず、宗教、神話や歴史に基づいた世界観も含む）から両者の関係を説き起こしている点において「ギリシア・ローマ世界」的な観点も拾いあげつつ、特に３世紀末以降の「ラテン文化の東漸」に関する記述（第２節）の手厚さが注目される。そこではまず、公的な言語としてのラテン語が帝国政府によって（いわば上から）用いられ、それが契機となってギリシア語圏におけるラテン語の需要と受容とをもたらしていったという前提がもちろん説明されてはいる。しかしその先がむしろ特徴的な記述となっており、必ずしも支配関係とは直結しない様々なラテン文学作品のギリシア世界への伝播が描かれ、支配のみを契機とするのではない、ローマ帝国という稀有な空間的な広がりを舞台とした多方向的な文化の交流がよく読み取れるものになっている。

なおこの第２節は、本書の中で最も多くローマ法についての記述がなされている部分でもあるが、法の内容というよりもその文化的な文脈に注目がされている。とりわけ、当時におけるギリシア語への翻訳作業の貢献度に注意を喚起する、ギリシア世界へのローマ法の伝播に関する記述は、ローマ法学の観点からも有益かつ貴重なものであると考える。

第３節では「言語と宗教の壁を超えて」と題して、コンスタンティヌス１世期以降のキリスト教の台頭と人々への浸透、そしてその文化的な受容の過程と古典的な宗教、世界観との影響関係が説明される。ここでもやはり、帝国の国教としてのキリスト教の「上から

の」位置づけというよりは、一般の信徒にもより近い崇敬の実態とそれを取り込もうとする教会組織の活動など、古代末期の人々の生活の中に根を張っていくキリスト教のあり方が中心的に描かれているのが印象的である。本章も総じて本書全体のコンセプトによく適合し、政治史の添え物でもなく純然たる文学的解説でもなく、当時の世界に生きた人々にとっての文化のありようを生き生きと描いた新しい語りとして意義深いものと思われる。個人的には、参考文献にも挙げられている著者の論文（２０１２年）において法学とともに扱われていた修辞学（弁論術、古代レトリック）について、それが本章のトピックのいずれとも深く関係するようにも思われただけに、より一層踏み込んだ著者の叙述を拝読したかったところではあるが、これは単なる無い物ねだりに過ぎないであろう。

キリスト教は、「焦点　内なる他者としてのキリスト教徒」（大谷哲）が中心的に扱っているトピックでもある。こちらは、田中の記述対象の始期であった４世紀よりも前の時代、キリスト教の黎明期（章題の通り、キリスト教徒がローマ社会にとって異物であったと位置づけられうる時期）を主に扱う章となっている。よく知られたテーマとしてのキリスト教徒とローマ人との出会い、そして迫害の問題などについては、近年の研究において精密な史料批判に基づいた見直しが進んでいる状況がまとめられており、本章は優れた手引きとなっている。しかし本章の特徴と言うべきなのはやはり、「マイノリティ」としてのキリスト教徒自身も含めた、ローマ社会に生きた人びとの視点から史料を読み解こうとしている点であろう。例えば迫害というトピックについて言えば、それがあったかなかったか、規模としてどの程度であったかというレベルの議論よりも、そ

のような迫害言説が現れてくるに至る社会的な状況や、その背景としての人々の意識に着目しているのである。歴史を扱う者として危ういことであるとは承知しつつも評者は、現代に生きる我々もまた異質と感じる対象へと向けているかもしれない眼差しを、本章を読み進める中で怖れをもって想起した。

ローマ法の観点からして興味深いのは、主要な史料として著者が引用するテルトゥリアヌスの記述であろう。「護教家テルトゥリアヌスは法学者テルトゥリアヌスか」という問題設定でローマ法の学説史上も著名なこの人物は、２６０頁に紹介される部分において、「ルキウス・ティティウス」「ガイウス・セイウス」というローマ法学者には馴染み深い（「甲」、「乙」のように用いられる）仮名を用いている（その意味で、この部分をリアルな事例の報告とは取りにくいことには留意が必要である）。また彼が法学者であったかどうかにかかわらず、言葉の力によって時に聴き手の意識や感情をも操作する技芸である弁論術への通暁が見て取れるその巧みな言説を、一般の人々の意識を後世の人間が推認するという営みの中においてどのように扱うべきかという問題は、少なくとも本章の論証に関係する論点ではあろう。

上述の通り、本書において経済に関するトピックは「問題群　古代世界の経済とローマ帝国の役割」（池口守）に委ねられている。本章は、まず第１節「古代経済史論争」において主として２０世紀以降の重要な学説の展開が紹介された後に、それらの見解（の対立）を軸としながら、次節以降で具体的なトピックを扱うという構成になっている。第２節「生産活動と流通」においては農畜産業・鉱工業及びその流通と消費について簡潔に解説を加え、第３節「帝国内

の物資の輸送」においてローマ帝国の領域内の陸海の物資輸送網について説明し、第 4 節「交易の拡大」では特にインド洋交易の重要性とその盛衰について（本章全体の構成の中では）かなり詳しく取り扱っている。結論においては、語りの軸として用いられてきた古代経済史論争の決着を図るというのではなく、それらの学説が研究の発展に果たしてきた貢献を十分に評価しつつも、論争の過程で確実なものとして明らかになってきた内容に立脚した、バランスの取れた理解を志向している。

本章の特徴は、何よりもまず近年の考古学の成果と、それを活用した歴史学による新たな考察を多く取り入れているところにあろう。第 2 期の刊行時期にはいまだ知られていなかった情報も多く含まれており、それらについて見通しやすいコンパクトな形での紹介が得られたことだけでも意義深いと思われる。本章では、限られた考古資料に基づいた全体像の推量にはあまり踏み込まれてはいない。読者は、本書全体の中でも群を抜いて多い写真等の豊富な添付資料から具体的なイメージを喚起されつつ、ローマ帝国における経済活動のさまざまな側面について確度の高い基礎を手に入れることができるであろう。

内容面における特徴としては、物資の流通及び対外交易に重心が置かれているという点を挙げることができよう。特に第 4 節で扱われるインド洋交易は、本文でも触れられている通り近年その重要性が改めて見直されており、ローマ帝国の経済力を支えた大きな要因ではないかと考えられるようになってきている。実のところこのテーマについては次に紹介する井上論文とかなりの重複がみられ、もう少し明確な分担が成立していればよかったようにも思われる（両

章の註において明示されている時間的な区分は、必ずしも実際の内容に即した線引きではない）が、このホットイシューについて両者のニュアンスの違いを味わいながら読み解くのも有意義ではなかろうか（なおそれに加えて、井上論文の参考文献に上げられている蔀（１９９９年）、マクラフリン（２０２１年、髙橋・赤松訳）も日本語で読み比べることができる）。

さて、その「焦点　三世紀の危機とシルクロード交易の盛衰」（井上文則）は、ローマ帝国の歴史を語る上で欠かせない「三世紀の危機」問題につき（これ自体についてはもちろん、著者自身による『軍人皇帝時代の研究－ローマ帝国の変容』（岩波書店、２００８年）を参照）、最新の研究動向に基づいた概観を与えつつも、政治や軍事の問題よりもむしろ交易という経済的な要素に重心を置いた論考となっている点にまずはその特徴が求められよう。しかしおそらく読者は、むしろその叙述のスケールの大きさに圧倒されるのではなかろうか。本書の枠組みとしての西アジアを遥かに飛び越えて中華帝国にまで至る「ユーラシア大陸の気候変動」を一つの要因として「三世紀の危機」を理解しようとする構想への言及に始まり、インド洋交易もまたシルクロード交易に繋がるものとして、その具体的な展開は中華帝国の情勢とも絡めて語られる。この章に引き続く形で本書の掉尾を飾る井上のコラム「『忘れられた西部ユーラシアの歴史像』－鈴木成高と宮崎市定」と併せ読めば一層了解されることであろうが、本書の全体構想の行きつく一つの方向性を本章が最も明確に現わしているともいえよう（時代的には半ばあたりに位置しそうな本章が最終章として配置されているのは、偶然かもしれないが示唆的である）。

インド洋交易の規模、そしてその盛衰がローマ帝国に対して与えた経済的なインパクト（あるいはローマ帝国の「危機」や「衰退」への寄与度）については、史料の根拠に基づきつつも、推測を交えて可能な限り具体的な数字を挙げて論じることが試みられている。推論の展開自体は合理的であり、ローマ帝国の「危機」と「衰退」を説明する一つのストーリーの提示として興味深く受け取られるものであるが、基本となるデータが全体像を描く素材としてはやはり確実なものとは言えないために（例えば「１億セステルティウス」、「利十倍」など。ムジリス・パピルスはもちろん重要な資料であるが、全体像へとどのように接続するのかは難しい問題である）、さまざまな可能性を想定しておくことが必要ではあろう。また「国家予算」の何分の一に当たるという表現がされるとき（２８５頁）、現代国家のもとで生きる我々としては、ローマ帝国では国家が担当していなかったような活動に支出の重心を置いている一方で、諸種の厳格な法的規制に縛られてもいる国家運営をどうしてもイメージしてしまいがちである。帝国全体の（広義における）公的な経済活動に占める割合という観点からは、著者の意図するところを越えて数字から過大なインパクトを受けてしまいうることに読者の側で注意が必要であろう（なお、著者の構想をさらに詳しく把握されたい方は、文献リストにも挙がっている著者の『シルクロードとローマ帝国の興亡』（文春新書）をも参照）。

ローマ側として最後に紹介する２つの論考は、テーマ設定の段階で特に本書の特徴を表している。「焦点　ローマ帝国社会における帝国と性差」（髙橋亮介）は、本シリーズにおいて初めて、ローマ社会における性差の問題をメインテーマに設定した。史料を用いた具

体的な検討の中心は、東西の地方都市（主として碑文史料に基づく）及びエジプト（主としてパピルス史料に基づく）における女性の活動に置かれる。まず、地方都市に残された碑文については、東西における差異をも指摘しつつ、男性と比較すればその数は少ないものの、公的に活動する女性の姿が現れていることを示す。エジプトのパピルス文書に現れてくるのは公的というよりもむしろ日常的な活動であるとされるが、ここでも女性が経済活動や嘆願の主体となる例が確認され、特に嘆願においては、女性の「弱さ」がむしろ戦術的に活用されている可能性も示唆されている。

碑文史料もパピルス史料も、個々の情報は断片的である場合が多い一方で、数百に上るまとまった量を扱うことができ、量的な分析になじみやすい側面がある。本章でも、女性が主体として登場する割合や、識字能力や経済力といったトピックにおける男性との比較などにつき、史料と近年の重要な研究に基づいて、具体的な数や割合を提示したうえでの議論が行われている。具体的な数字の解釈は常に難しく、ともすれば極端な結論に至ってしまいがちでもあるが、著者は当時の女性が主体として史料に登場するという事実の背後にある文脈を様々な側面（女性の自由な意思によるのか有力家族への所属ゆえであるのかという判断の難しさ、男女ともに貧富による差異をも認識する必要性、地域的な差異の存否と程度、時期による変化など）から慎重に検討し、安易な一般化に飛びつくのではなく一貫してバランスの取れた推論を心がけているように思われ、本章の行論全体の説得力を増している。

本章ではローマ法に関係する記述も随所に見られるが、２つの点が気になった。第一に、エジプトにおいて「２１２年のローマ市民

権の全般的付与」を境にローマ法の適用の可否が切り替わったように読める記述（１９５頁）である。この説明はもちろん理論的には正しいとはいえ（学説上もこのように図式的に説明されることは確かに少なくない）、法を適用するという営みが少なくとも現代国家におけるようには統一的でない世界を前提にするならば（そもそもここで言う「ローマ法」とは具体的に何を指すのか）、この図式化にも本来は慎重な留保が必要であろう。次に、ローマ法学者が語る「性別の弱さ」が援用される部分であるが（２００頁）、これは女性を対象とする後見制度の趣旨を述べたものであるところ、２世紀の法学者ガイウスにおいてこの種の理由付け ratio は既に「真実というよりむしろ建前と見られる magis speciosa videtur quam vera」とされており、三子の権による免除とは別に、女性を対象とする後見制度の実質自体がその段階で相当程度失われてもいたことには注意が必要である（ガイウス『法学提要』第１巻第１９０節）。もちろんこの種の言説が実際上は力を持ち続けたというのは別の問題であり、本章の趣旨はむしろそちらにあろうから、この指摘も法学の側からの単なる注意喚起に過ぎない。

「焦点　「古代末期」の世界観」（南雲泰輔）もまた新しい研究の潮流を踏まえつつ、帝国に生きた人々を対象とする考察として重要な貢献をなす。本章は、激動する古代末期という時代における人々の「心性の変容」という観点に立って当時の人々の世界観を史料から読み取り、それを通して古代末期という時代の特質を解明することに挑んでいるのである。第１節において古代末期論の展開と本章の課題とを簡潔に説明した著者が、第２節以降の具体的な論証の中で柱とするのは、起源を古代ギリシア世界に遡るヘレニズム地理学

と、整備された街道網の形成を前提としたローマの旅程表的伝統である。これらの知の集積が流れ込んだ古代末期のローマ帝国では、旅程表や案内記などの地理的な世界観を示す著作が多く現れた。著者によるそれらの史料と関連文献の簡潔な紹介（特に２３８－２４０頁）は、興味を惹かれた読者にとって良い導きとなろう。

本章においてより意義深いと思われる部分は、それまでの議論を踏まえつつ、ポイティンガー図に関する分析を一つの軸として展開される第３節であろう。著者はこの「謎に満ちた」、多様かつ多元的な情報を含み込んだ地図史料について、最新の研究成果に拠りつつ、それがヘレニズム地理学の系譜に属すると同時に旅程表的伝統にもつながり、宗教的には古代末期的な併存状況を表すものでもあると説明する。そして古代末期の世界観も、ヘレニズム以来の継続性と古代末期の新規性をともに取り込んだ特異な発展を遂げたとするのである。またその際、一般の人々の世界観の問題のみならず、崩壊していく世界の一体性を繋ぎとめようとする権力者の意志的な働きかけが地図を成立させるという可能性も（権力者の地図への関与それ自体は、もちろん古代末期に限った話とされているわけではなく、むしろ本章の随所で強調されてもいる）重要なものとして指摘されている。

ポイティンガー図についての推測それ自体は必ずしも古代末期の世界観一般に敷衍できるものではないかもしれないにせよ、古代末期における継続性と新規性の融合による新たな世界観の誕生、そして権力者がある種の理想の世界をプロパガンダ的に表現するということが地図の成立に係る重要な契機であるという認識には、評者としてはいずれも納得できる。本章はローマ法に直接触れるもの

ではないが、上記のストーリーは古代末期においてローマ法学が被った法典編纂という特徴的な出来事に至る流れを見るかのようでもあり、地図と法とはいずれもあるべき世界への「希求」である点において小さからぬ共通点があることに気づかされた。

西アジアに関する 2 つの章については、詳しくはより適任の方による評に委ねたいと考えるが、一読者の観点からの所感を述べておくこととしたい。

「問題群　ローマ帝国と対峙した西アジア国家」（三津間康幸）は、西アジアの側から見た前 3 世紀から後 7 世紀までの通史となっている。ローマ帝国との対抗関係を一つの軸として、主としてアルシャク朝パルティアとサーサーン朝ペルシアの興亡について政治史の観点から記述がなされているが、第 4 節において天文学・占星術、第 6 節においてマニ教・ゾロアスター教・キリスト教に関する記述も加えられており、本文中の丁寧な文献指示と章末の充実した参考文献とを併せて考えれば、幅広い知識へのアクセスが担保されているものと思われる。

利用される史料の面では、ローマ史に詳しい読者にとってはおなじみのローマ側の文献ももちろん現れるが、第 2 節のアルシャク朝前史において紹介される「予言」文書を皮切りに、諸種の粘土板文書、碑文やコインといった重要な史料が具体的に紹介されており、比較的短い紙幅の中で多くの情報に触れられるように工夫されている。また内容面では、ローマ帝国はもちろんのこと、中華帝国をはじめとした東方との関係についても各所に記述があり、本書の構想にふさわしいスケールの大きさを感じられるものとなっている。

おそらくは紙幅の制約から、記述の取捨選択には苦心があったの

ではないかと思われる。もちろん、史料の残存状況によってそもそも情報量の少ない事柄もあろうが、やはり千年近くにわたる時期をカバーしようとする中でやむを得ず削った部分も少なくなかろう。本書のような枠組みが今後さらに浸透していくとすれば、通史的な部分についてだけでも、ローマ側と西アジア側の記述量が一層釣り合うことが理想ではあろう。

「焦点　西アジアの古代都市」（春田晴郎）は、ローマ側を含めて本書で唯一、都市それ自体にフォーカスした章となっている。そのこと自体、帝国という空間を扱うこととした本書の特徴として、興味深い現象と言えるかもしれない。また本章は、イラン高原の都市を中心的に論じるというその構想のために、例外的に紀元前６世紀からという長い期間を扱っている。

本章もまた、最新の重要な研究を紹介し、内容的にもその成果を存分に活用するものである。ただ都市に関する一次史料は極めて限られているので、ここでは都市史について学説上確立した内容の概説が行われるというわけではなく、むしろ「作業仮説」が提示されるのであるという（１６４頁）。ローマ帝国側の雄弁な印象を受ける諸都市に慣れ親しんだ評者などからすると、ここで史料の僅少さの大きな原因であるともされている寡黙なイラン高原の都市との対比は、それ自体として興味深い。

さらに、「都市」を一般的に示す単語さえもはっきりしないという言語状況が各時代（ハカーマニシュ朝、アルシャク朝、サーサーン朝）について繰り返し確認されるとき、人間集団の公的な単位として都市という存在を自明視しがちな認識枠組みそれ自体について、我々が問い直す契機を本章は与えてくれる。さらに都市のあり

方についても、市壁が存在せず、政治的に重要な機能を果たした庭園を含んだ開放的な空間であって、また居住域が密集しない分散型の都市景観を有していたと考えられる点も繰り返し指摘される。この点も、都市という存在のイメージ全般に関わる問題として、重要な意義を持つであろう。本章ではあまり触れられていないが、この点で日本の都市との比較はどのようになるのかということは素朴な疑問として気になったところである。

最後になるが、本書には５編の「コラム」が付されており、先に紹介した井上によるもの以外には、文字記録と協働する考古学の本領を重要な具体例に即して簡潔かつ明瞭に示す「考古学の存在感とリアリティ」（冨井眞）、基本的事項を説明しつつ、本書の構想にふさわしく、碑文を建立した人々の意識を考える「史料としてのラテン語碑文」（中川亜希）、東西のはざまにあって国際的な都を繁栄させた、本書のテーマの結節点となるような勢力に関する「ナバテア王国の興亡とローマ帝国」（桑山由文）、ローマの生んだ紛争解決の精緻な仕組みについて、術語に必ずしも依存しない根本的な解説を与える「ローマ法の後世への影響」（佐々木健）がある。いずれも、各章の検討と関わる重要な情報を補完するものでもあり、各２頁と短くはあるが、各分野の専門家による興味深い記述がなされている。

（５）総評

全体として、多くの一次史料へのアクセスも考慮されつつ、文字通り最新の研究を踏まえた専門性の高い記述がなされていると言えよう（２０２０－２１年の文献が参照されている例も少なくない）。それを可能にしたのは、各章の執筆者の本領を存分に発揮さ

せる本シリーズの性格と、限られた紙幅に充実した内容をまとめ上げた各執筆者の力量とであろう。

本書の編集方針について、まず「ローマ帝国と西アジア」という構想がどこまで生かされたかという点については、率直に言って道半ばであるという印象はある。もちろん「展望」をはじめとして、随所において両者の交錯は読み取られ（特に交易に関する記述は必然的にそうなる）、ローマ側に知識が偏っている―読者としては、大いに視界を広げられたことは確かである。しかし、冒頭で述べられるように両者の関係が「古代世界の歴史的意義を考えるうえで基軸となる（３頁）」ものであって、「ローマ帝国を、従来の「古代ギリシア・ローマ文明」として括られてきた捉え方から外し（５頁）」た際の新たな世界観として据えられるほどのものであるならば、個別の論考においてもその構想がより一層明示的に意識されることが望ましいように思われる。ただしこのような構想は、巻末の井上コラムも述べる通り、そもそも学界の最先端においてさえ十分に浸透しているわけではない。その意味で、むしろ未来の展開を先取りした野心的な取り組みであると評するべきなのかもしれない。

「帝国の歴史」という構想については、ローマ帝国内の人々とその活動の多様性を描き出すという目的はおおむね達成されていると思われる。具体的には、各章に対する評で指摘したところである。ただ、その多様性にとって「帝国」という存在がどの程度の意義を持っているのかは、判断が難しいケースも少なくない。「ローマ帝国」を捨象して、例えば「古代西洋世界における多様性」といったテーマを設定したとしても成り立ちうるかもしれない、ということである（そしてもちろんそれはそれとして、「世界史的な意義」を

求めることもできるであろう)。

その意味で本書において、「ローマ帝国」が存在したからこその多様性、換言すれば「ローマ帝国」の世界史的な意義に直結する要素を評者なりにピックアップしてみると、それ自体として世界的スケールを有する東西交易のトピックを除けば、最たる例はやはりギリシア（世界、人、語、文化）とのかかわりで現れてきているように思われる（具体的には、「問題群」の藤井論文が典型例ということになろう)。言うまでもなくギリシア世界は後発のローマ帝国に呑み込まれた後もその生命力を保ち、それ自体さまざまな変容を被りながらついにはビザンツ帝国へとつながっていくわけであるが、そこにおける多様性は、まさしく藤井論文のタイトルが示唆するように、ローマ帝国の「支配」に対する先進のギリシア世界による複雑な反応から産み落とされていったものである。しかもギリシア世界は、そのようなプロセスを自ら観察し、記録し、伝達するだけの文化的蓄積を有していた。ローマ帝国ならではの多様性が成立したことと、しかも我々がそれを認識できるというある種の幸運とにとって、ローマ帝国が先進の文化圏を吸収しながら成立したという経緯は大きな役割を果たしていよう。

支配が逆説的に多様性を産むという上述の現象は、ローマ帝国による支配の中核の一つをなしたローマ法の世界においても観察できると思われる。田中論文に取り上げられたローマ法のギリシア化、そして西方においてはいわゆる卑俗化の現象が、その例として挙げられるのではなかろうか。ローマ法を用いての支配が、その対象者に適応と反発とが交錯する複雑な反応を生じさせ、その反応がローマ法自体をも変質させていくというプロセスである。この種の多様

性の産まれ方とそのメカニズムを認識するという点において、ローマ「帝国」の世界史的意義の一つが浮き彫りになるように評者には思われた（ある意味で支配の主客が転倒するという変化を観察できる稀有な例として、大谷論文の扱うローマ帝国におけるキリスト教ももちろん重要である）。

また古代世界に特に顕著なことではあろうが、ローマ帝国の支配（あるいはこれは「ローマ化」の問題でもあろうか）によって産まれたとまでは言えなくとも、そのプロセスなしには記録として残らなかった可能性が高い「多様性」が数多く存在することにも改めて気づかされた。上述のギリシア世界などはこの点でむしろ例外であって、それ以外の多くの地域については、ローマ人が他者としての視点から残した多くの文献における記述だけでなく、例えば髙橋論文で扱われている各地の碑文の記録なども、ローマ帝国という存在なしには多くを得ることはできなかったであろう。いわばローマ帝国は、その広域支配と記録文化とを通じて、それ自体として古代西洋世界最大の歴史家ともなっていたと言えようか（南雲論文２３５頁で、領土の拡張と地理学的知見の増大とが循環するプロセスにおいて地図が作成されていく、という趣旨が述べられていたことも想起される）。さらに一歩を踏み込むならば、そうして例えばラテン語で記録が行われる際には、その記録それ自体とその対象たる現地の実態との間には必ず何らかの齟齬が発生するのであり、それがまた新たな多様性の発生にもつながりうる。おそらくこの探究には、終わりがないであろう（この文脈で、髙橋論文末尾をも参照）。

ギリシア世界に着目し、帝国の支配あるいは記録文化におけるローマ化の観点を通してローマ帝国の世界史的な意義を語る本評は、

本書の構想に沿ったものとは言えないのかもしれないが、もとより本書もそれらの要素を否定し去る趣旨のものではない。新しい視点に立ち、最先端の研究成果に基づいて広範なトピックをカバーする本書が幅広い読者に喚起するであろう多様な反応の一つとして、本評が受け取られれば幸いである。